

母親のこと

NPO法人 道路の安全性向上協議会
専務理事 吉川 良一



3月11日で、東日本大震災から6年が経過した。震災直後の津波の映像を見ながら、故郷金沢で一人暮らしの母親のことを思った。あのような津波が来たら、ひとたまりもないであろう。実家は金沢市内とは言え、子供の頃は一面の水田地帯で標高は10mもない。それでも、内灘砂丘という鳥取砂丘に次ぐ日本第2の自然の防潮堤が守ってくれていたが、最近では砂丘を削っての宅地開発が進んだため、その効力は失われている。

4月になって、仕事のついでということで、母親のところを訪れた。父親を早く亡くしたので、30年以上も一人暮らしで気丈である。前年の夏には、親族一同集まって米寿のお祝いをしたところだ。話題が大震災のことになったので、私から聞いてみた。

「あんな津波が来たら、一体どこへ逃げる？ 近くのスーパーの屋上だと、歩いて5分位で行けるから、あそこがいいと思う。近所の人も、きっとそこに避難するから、一緒に行けばいい。」答えは、まさに想定外のものではあった。



「何故、逃げる必要があるの。阿弥陀様が折角、一緒に行こうと言ってくれているのに、何で逃げなきゃいけないのよ。」母親は、熱心な浄土真宗の信者で、極楽浄土に往生すると信じて疑わない。真宗では、信心に篤い人を妙好人(みょうこうにん)と呼ぶ。僧侶ではなく、全くの一般人で、名もなき人々だが、常に死というものを全く恐れていない。私にはこの強さが理解できず、本箱に埋もれていた「歎異抄」を取り出して読んでみた。もう一回読んでみたが、分からない。頭で理解しようとしてはいけない、ということだけは分かった。

それから1年半後、私がNPOを立ち上げるきっかけとなった中央道笹子トンネルの天井板落下事故が起き、9人もの尊い命が失われた。日曜日の早朝8時のことであったが、対策本部を立ち上げ、記者会見を開き、メディアに状況を説明した。記者会見は、毎日、定時報告のように行った。状況把握と原因究明のための調査を同時並行的に進める一方で、全国から多くの支援の申し入れがあり、復旧のための準備も進んでいった。そのような時に、母親から一通のメールが届いた。新しもの好きで、早いうちから携帯電話を使っており、私の誕生日などには派手なデコメを使ったバースデー・カードが届いたりしていた。多分、記者会見の私の姿を心配してメールをくれたと思い、開けてみた。

「あなたの人格が試されています。部下、同僚をいたわりなさい。」

その半年後に、母親は亡くなった、穏やかな最期であった。